

# 仲間と協力し合い、意欲的・主体的に取り組む体育学習のあり方

## 大分県佐伯市立鶴岡小学校

全校児童数	518名(男子273名 女子245名)		
全クラス数	21	教職員数	43名
体育専科教員訪問学校数			8校
訪問校	米水津小、東雲小、蒲江翔南小、明治小 八幡小、上野小、木立小、松浦小		
体育専科教員名		三重野 陽	

### Plan：取組時の課題と計画

#### 1 取組時の課題

- (1) 体力調査より県平均に比べ男女とも50m走・上体起こし等が低い傾向にある。
- (2) 低学年のうちに身につけてほしい基礎感覚・用具操作能力の定着が不十分である。
- (3) 協力し合って「教え合う・励まし合う・助け合う」活動(話し合い活動)の定着が不十分である。
- (4) 振り返りで、お互いを認め合う・感謝し合う発表が少ない。

#### 2 取組の計画

- (1) 児童実態の把握
- (2) 本校での各領域における指導(1～3学期)
- (3) 訪問校における体育指導(1～3学期)
- (4) 児童へのアンケート調査を行い、運動への意欲・興味・関心を検証

### Do：実践内容

#### 1 運動量の確保

どの単元の授業においても、一人ひとりの子どもの運動量の確保を意識して授業を組んできた。基本的な流れは以下の通り。

- (1) ウォーミングアップ(準備体操含む)
- (2) めあての確認(本時で身につけたい力の確認)
- (3) 補助運動(主運動につながる動き)
- (4) 主運動(本時で身につけたい力)
- (5) 振り返り(めあてを意識して取り組めたか)

#### 2 場の工夫

以下4つの観点を意識して、場を設定してきた。

- (1) 子どもたちが会場に入った瞬間に興味をもてる場
- (2) 子どもたちの実態に合っている場
- (3) 子どもたちが安心かつ安全に取り組める場
- (4) しっかりと運動量を確保できる場

#### 3 体育環境の整備

- (1) 道具の充実(一人ひとりにいきわたるように)
- (2) 整理整頓
  - ① 担任や子どもたちが安全かつ、容易に道具を出し入れできるように、動線を確保する。
  - ② 道具の出し入れの時間が短縮できることで、運動量の確保につながる。

### ●工夫したこと(&苦労した点)

#### (1) スモールステップ

どの子どもでもできる運動からスタートして、できる喜びを味わわせつつ、少しずつ難易度を上げ、自ら挑戦してみようと思えるように意識した。子どもたちは安心して取り組むことができ、「やってみたい」「できる気がする」という前向きな気持ちをもつことができたと感じている。

#### (2) 見通しをもたせる

1時間の授業の見通しをもたせるため、ホワイトボードに流れを提示した。また、運動のコツやポイントを意識させ、取り組ませることができた。

#### (3) 場やルールの工夫

運動量の確保、安全性、子どもたちが楽しめる、等の観点から場をつくってきた。また、既存のルールにとらわれない、学級(学年)の実態に応じたルールづくりを行うことができたと考える。

#### (4) 他校での訪問授業では、道具の所在や在庫数の把握が難しかったため、瞬時にどのような場にするか、頭を悩ますことがあった。

#### (5) ICTの環境が整っていないため、アナログでの指導等がどうしても多くなってしまった。体育館に電子黒板及びWi-Fi環境等を整えてほしい。

### Check：取組の成果

- ① 「マット」や「跳び箱」の学習では、工夫したサーキットの場を多く取り入れることで主体的に取り組む児童が多かった。1～3年の段階で回転する感覚をしっかりと身につけることで、台上前転ができる児童が多数いた。
- ② ベースボール型ゲームでは、子どもの実態に即した教具(大きさや硬さ)やルールを簡易化することで、子どもが安心して楽しく学習することができた。

### Action：今後の課題

- ① ICTの環境と同時に、活用をさらに進めていく必要がある。
- ② 子ども同士の関わり合いの質や量を高めていく。

### ◎体力向上の取組がもたらす波及効果

○安心して活動できる場の工夫やスモールステップで取り組み、できる喜びを味わわせることで、子どもが自信をもち、積極性や自主性が高まるなど他の学習や活動への好影響が考えられる。また、子どもに必要な自尊感情を高めることにもつながると考える。

## 1. 基礎感覚づくり・補助運動・主運動

## (1) 体を動かすことが楽しいと思える導入

**苦手意識=できない**、この考えを払拭することが体を動かす楽しさを感じられる大きな一歩だと考える。そのために、スモールステップで簡単にできるラダー（写真）などを取り入れた。また、子どもたちが興味関心を持ち、安心して楽しくできる活動として風船を使った活動も取り入れた。頭や手を使い、協力しながら、安心して取り組んでいた。



## (2) 体を動かすことが楽しいと思える場づくり

体育館やグラウンドに集まったときに、子どもたちに「今日は何をするんだろう」というワクワク感を持たせるために、場づくりは重要であると考えている。準備は大変なところもあるが、子どもたちの目の輝きを見た瞬間に次はどのような場にしようかと、こちらの意欲にもつながる。

体育の授業に専念できるため、工夫した場の準備に時間を費やすことができる。

**工夫した場=子どもの意欲喚起**につながる。



## 2. 昼休みの体育館使用について

## (1) 子どもの主体性を大切にし、体力向上につなげるために

「好きこそものの上手なれ」のことわざにもあるように、好きなことには自然と熱中し、もっと挑戦したい、上手になりたいという思いが生まれてくると考えている。体育の授業では不完全燃焼の子どもたちのために、昼休みに体育館を開放した。多くの子どもたちが体育館に集まり、自分が挑戦したい場に何度も足を運び、意欲的に取り組む姿が見られた。子どもの中には「跳び箱が跳べた。」と嬉しそうに教えてくれた子もいた。



## 3. 環境・整備について

## (1) 体育倉庫等を整理し、道具の出し入れをしやすい動線をつくる。

多くの職員が授業で使う道具の数々。何がどこにあるのか、一目瞭然でわかることが大切であると考えている。道具の位置が把握できても、出し入れが容易でないと意味がない。出し入れが容易な動線をつくることが大切である。

**整理された倉庫=道具の出し入れが容易に**

= 準備時間の省略

= 運動量の時間確保



## 4. 最後に・・・

〇上手くいったかどうかは、子どもの表情や反応、成長ぶりを見れば一目瞭然。

「まだやりたい!」「これ楽しい!!」 = 大きな喜び

〇トライ&エラーを繰り返しながら今後も研究と修養に努めていきたい。